日本文学の発見：俳諧と滑稽の境地

—周作人の場合—

顧　偉　良

I　問題提起

二十世紀初頭の中国は、民族国家の存亡をめぐる政治的、社会的体制の激しい“揺れ”の危機的状況に置かれていた。この時代は、政治・社会の構造から言語・文学の表象まで連鎖する様々な徴候を含めて、確かに変容の時代だったと言える。そのような変容の時代に新しい共同体の文化建設を目指す新文学運動の推進者の一人、周作人（1885－1967）に於ける日本文学の受容について考えるのが筆者の問題意識である。このように考えるのは、二十世紀の中国における外来文化の摂取は、つねに共同体の文化建設をめぐる「理想」と「現実」という二つの文化的要素が底流となっているからである。一方、日本は二十世紀初頭の中国にとって、紛れもなく国民国家＝「文明国」としての新しい“想像”の共同体を意味するものであった。特に明治の新文学は、中国の新文学運動にとって新しい文学のモデルだったのである。ところが、文明衝突によるこの二つの国同士の接近において過去に様々な文化的摩擦が生じ、それらが今日にまで続けられていることは否めない。両者における文化上の関係、そして中国という民族国家をめぐる「理想」と「現実」のなかで日本文学の発見について考察することは、有意義であり、それは日本文化の理解にもつながり、また文化研究からの要請でもある。本研究は以上の視点から、周作人の文化活動を文化生産の実践として位置づけ、彼の日本文学に対する受容を検証するのが目的である。

周作人の日本文化に関する論及は多岐にわたり、彼の日本文学に対する受容

は、<一>創造的模倣から新文学としての明治文学の発見、<二>散文的境地から日本文学における独創性の発見という迂回した捉え方があった。本研究ではこの考察を通じて、周作人における日本文学の発見は、一人の文学者の軌跡に留まらず、日中文化史を考える上でもいろいろと示唆を与えてくれたものと考えられる。

Ⅱ　新文学としての明治文学の発見

既に清朝末期の啓蒙思想家、梁啓超の『ハワイ紀行』(1899年)、『少年中国説』(1901年)『新中国未来記』(1902年) などにより、外部世界の発見と共に、現代文化のモダニティーの意識が芽生えてきたと言える。それと同時に、時間意識において伝統文化との断絶が深刻であった。この恐るべき断絶と時間意識は、『時務報』(1896年、上海) や『清議報』(1899年、横浜) などを創刊した梁啓超の強い危機感に基づく歴史意識から生まれたものである。一方、清末、民国初頭の文壇には歴然とした二つの批評流派が存在した。一つは伝統文学を批評の対象としたものであった。この陣営は漢学の伝統を受け継ぎ、もっぱら文章を重視し、文学内容には無関心で、一種の実証的批評派である。もう一つの流派は、陳独秀、胡適、周作人らの新文学運動の推進派で、彼らは批判の眼差しを伝統文化に向け、文学と人生の結合を訴える。内容的には思想的、政治的の文学批評である。変革をもたらす意味では新文学運動は、一種の文化的革命である。ところが、民国初頭に流行した「新小説」は、依然として艶情小説や黒幕小説 (露悪趣味的) が中心で小説観念には新しい変化が見られなかった。これに対し、周作人は仲密と署名した「“黒幕” を論ず」の中でこれらの小説を批判した。そして、一九一八年に発表された「人の文学」の中でこう述べている。

> 中国に於いてまず人間とは何であるかを論じなければならない。女子や子供は勿論のこと、人間の問題はまだ解決されていない。生物から進化した人は、霊肉一致のものを指す。私の言う人道主義とは、世間に言われる

「憐憫」や「施し」を行う慈善主義ではなく、個人主義に基づく人間本位主義である。この人道主義に基づいて、人生の諸問題を記録し研究する文字を加えて、人の文学と呼ぶわけである。中国文学では人間を描く作品は元来少なく、儒教や道教のような視点で書かれた文章は元々その資格を持っていないのだった。[①]

文中で周作人は、十種類の小説と戯曲を挙げ、それらは「人間性の成長を妨げ、人類の平和を破壊するものであり、すべて排斥すべし」と主張した。また「新文学の要求」[②]では、「今の中国では唯一必要な文学は、即ち人生の文学である」と述べ、その内容については、＜一＞人間的であり、獣性的、神性的なものではない、＜二＞人類的、個人的であり、種族、国家、郷土、家族のものではない、と指摘した。これらの主張においてかなり人間的要素が強調されているが、当時、中国の民衆がどんな思想的、文化的状況に置かれていたのか。次の文に注目したい。

中国で生活上に受ける苦痛が文学に現れる影響は二つあり、一つは賞玩であり、もう一つは怨恨である。ロシア文学において、残酷な物語を描く病理的現象はしばしば見られるが、中国文学においては一種のシニカルな態度が見られる。これは民族の衰えであり、苦痛に慣れた症候である。怨恨は悪いとは言えないが、概括的な怨恨は、文学の精神に反するものである。イギリス人のフォレット（Follett）氏は、「芸術の尊さは、すべての傲慢や偏見、怨みを否定することにある。なぜなら、芸術は社会的だからである。」と言っている。ロシアの文人は、じめじめした雑巾（訳注：ロシア文学における恥辱を受ける譬え）の中から永遠なる人間性を追求しようとするのに対し、中国の文人はそれらをすべて抹殺して、兵士と官僚のみを特殊な階層と看做している。これは明らかに旧小説の影響によるものである。別の面から見れば、これは思想の狭さと専制主義の結果と言えよう。中国文人に欠けたのが自己反省の精神であり、従って社会の暗部を描

くならば、他人のプライバシーを攻撃するかのように受け止め、自分の過去に触れたら、自己顕示行為だと思ってしまう。これなら、古い文人の慣わしと言わざるを得ない。第一、中国にはまだ新文学が起こっていない。今流行っているのは殆ど古い文学であり、その観念は誤謬が多く、ロシアの新文学とは比べものにならない。中国は精魂の尽きた老人の如く、生涯に人生の苦難を嘗め尽くしたが、幸せを楽しめる余力が体内に留まらず、その結果、将来に幸せの到来をとうてい信じることもなく、その願いも込めていない。しかも以前に受けた苦しみは、彼にとって唯一真実なる所有のものだったと信じ、他のものに較べても、猶も大切であると思っているのだ。このように衰えた民族と老人は、自然の法則から逃れられないのである。中国新文学の前途は、従って漠然としたものだろう……。しかし、我々は衰退した民族の少年であり、個体としての生命力を結集すれば衰えた民族の気運に対抗できるものと思う。民族の生命力は衰えたが、個体としての生命の芽はまだ若く、新しい生命力を増強すれば、希望を齎す可能性が無くはないと信じる。③

上の文において、周作人は当時の中国民衆が置かれていた世紀末的な状況を目ざとく理解していた。その目は、いわば『茶の本』の中に、「かの国の長い災禍は人生の意義に対する彼の強い興味を奪ってしまった」（岩波文庫p.37）と記した岡倉天心に近いものと思われる。“少年中国”はそのような朦朧状態から出発しなければならなかったのである。一九一一年、周作人は日本留学を終え、帰国後、浙江省立第五中学校の英語教員を務め、紹興県教育会長を兼任。新進としての周作人は、民俗学の視点から児童文学を提唱し、地元で民謡の収集に力を注いだ。一九一七（民国６）年九月、魯迅の斡旋で北京大学文科教授として迎えられた周作人は、新文学運動に出会った。

一九一八年、周作人は北京大学の小説研究会で「日本近三十年来小説之発達」④と題する講演を行ったが、彼は明治以来の小説について各流派にわたる

九項目を立てて、明治の新文学を当時の中国における旧派の小説界の現状と比較してこう述べる。「日頃、日本文化に対して、我々はある考えを持っており、即ち日本文化は“模倣”である。西洋人の中にも“日本の文明はシナの娘”であると言っている人がいるが、このような考えは必ずしも適切とは言えない。日本の文化は、“創造的模倣”と言っていいと思う。明治の四十五年間、文学は表面的に西洋“模倣”のように見えるが、実際は異なり、一種の“創造的模倣”と言っていい。日本の文学界では、ある自覚をもって善を受け入れ、しかも誠意をもって“模倣”をしようとする。かくして、数多くの独創的な文学作品が生まれ、二十世紀の文学を創り上げたのである。」と指摘した。一方、批判の矛先はそのまま旧派の小説界に向け、「中国で新小説の提唱は二十数年経ったが、何の実績も現れなかった。一体どんな原因だったのか？　私からみれば、中国人は模倣しようともせず、また模倣もできないのだ。（略）この弊害を救おうとすれば、まず歴史的因襲を打破し、真心をもって他人を模倣しなければならない。こうして初めて模倣から独創的な文学が生まれるのだ。日本はその見本である。（略）中国小説界の現状は、日本の明治十七、八年代を彷彿とさせるところがあるが、目下、思い切った方法は、即ち外国文学の翻訳と研究を提唱すべきである。」と述べた。更に周作人が注目したのは、文学と人生の結合であり、これが新文学出発の新たな一歩であると位置付けている。

新文学運動において文学のモダニティーの導入は何よりも急務だった。その眼差しが明治の新文学に向けられたのも理の当然である。周作人は、明治新文学の状況を視野に入れ、旧派の小説を否定し、文学の革新を推進しようとした。ここに、目覚めた周作人という自画像が浮かび上がってくるのを忘れることはできない。一九二三年、周氏兄弟の共訳で『現代日本小説集』が刊行され、「序文」の中で周作人はこう述べている。「日本の小説は、二十世紀において驚異的な発展を遂げ、それは国民文学の精粋を示すものばかりでなく、多くの作品は世界的な価値を持っており、ヨーロッパの現代文学に匹敵することができるのだ。（略）中国と日本が様々な関係により、我々は日本を知る必要があり、

しかも日本を知る便利な面がある。実験的に編集した不完全な小説集だが、我々は東洋に生まれたという利点を生かそうとしたに過ぎなかった。」[5]と。この小説集には、自然主義文学以外の代表的作家、詩人が十五人紹介され（国木田独歩、夏目漱石、森鷗外、鈴木三重吉、武者小路実篤、有島武郎、長与善郎、志賀直哉、千家元麿、江馬修、江口渙、菊池寛、芥川龍之介、佐藤春夫、加藤武雄）、翻訳の目的は「日本の現代小説を紹介することにある」と記されたが、究極の目的は、やはり新しい小説の観念と文学のモダニティーを導入することにあったと思われる。一九二五年、魯迅による厨川白村『象牙の塔を出て』の中の「エッセイ」と「エッセイと新聞雑誌」（二章）の訳出もそのような意味合いを持っている。因みに、日本留学期に周氏兄弟により、文語で翻訳された初の『城外小説集』（第一集、第二集、1909年）は、合わせて数十冊しか売れなかったという。

『現代日本小説集』に漱石の『クレイグ先生』（「克莱喀先生」、魯迅訳）が収録され、中国の現代散文に与える日本文学の影響において『クレイグ先生』の位置づけは注目すべきものである。[6] 散文形式は勿論のこと、この作品は『藤野先生』（1926年）に決定的な影響を与えたと思われる。『クレイグ先生』の優れた点は人物の描写にあると思う。そこから影響を受けた魯迅は、『藤野先生』において別の次元で人物の描写を考え、文明国で遭遇した弱小国の支那人の身体と、「他者」としての身体を発見したのである。言い換えれば、このテクストにおいて発見された「他者」としての身体は、近代医学の身体医療の実践から文化生産の実践への転換と意味付けられるべきものであろう。因みに、身体医療と文化生産の実践は等価であり、両方とも「転換」に価値が置かれている。従って、医学を棄てて文学への転進による救済という意味での従来の解釈は、そのような転換の意味合いを象徴する『藤野先生』の解読につながるとは、とうてい考えにくい。ただし、第三世界の文学において、しばしば民族共同体の寓話形式を通して文学テクストが生産され、そのような文化生産の実践により、近代小説は発展していくのである。[7] この点で言うと、魯迅の文学世界に於いて

小説の寓話形式が顕著に現れている。

上に挙げた数々の評論から見るように、初期周作人の思想的傾向が見られる。彼の「ロシア革命と虚無主義の異同」(1907年)の一文で初めてロシア革命の思想が紹介され、一九一〇年代には、彼はクロポトキンの無政府主義に関心を示し、ユートピアの理想を信奉した。周作人は、一九一八年五月、東京堂書店から購入した『新しき村』を読み、共感を覚えたという(『周作人年譜(1885－1967)』、天津人民出版社、2000年)。同年五月に書かれた「武者小路実篤『ある青年の夢』を読む」、そして訳された与謝野晶子の『貞操論』が『新青年』4巻5号に掲載。以降、実篤の非戦論、人道主義思想、及び女性問題に関心を持つ。その後、白樺派の「新しき村」運動に共鳴し、自ら「新しき村」をも訪れ、その理想郷を熱心に中国に紹介した。「日本の『新しき村』」、「日本の『新しき村』訪問記」、「『新しき村』の精神」(1919年)、「『新しき村』の理想と実践」、「『新しき村』の討論」(1920年)など、ここにあげた数々のルポルタージュは、理想郷を求める周作人の足跡を物語っている。この期に武者小路実篤の影響で、千家元麿の口語自由詩も多く訳された。周作人と「新しき村」の関係について先行研究は多数あるが、紙幅の制限でその紹介を省く。

Ⅲ　俗文学から見る日本文学の独創性

中国の新文学運動は、実質的には白話文による言語革命であり、目指す目標は「生きた文学」であり、「国語の文学」を実現することだった。白話文運動の推進力は啓蒙であった。その白話文草創期に口語自由詩が提唱され、短詩形の小詩実験(1921～24年)も行われていた。その間、周作人は新詩の理論作りに大きく貢献した。「日本の詩歌」、「一茶の詩」(1921年)、「啄木の歌」、「日本の小詩」、「一茶の俳文集『おらが春』」、「日本の諷刺詩」(1923年)などの評論で、詩歌の体裁として日本の短詩形が紹介され、特に啄木の歌が多く翻訳された。周作人の翻訳は、決して選択なしに行ったのではなく、彼が啄木の短歌、一茶の俳文に注目したのは、彼らの斬新な口語自由体の個性的な文学スタイル

に魅了されたからだと思われる。一九二一年、最初に訳された啄木の『はてしなき議論の後』などを見ると、啄木の思想性に対する周作人の関心が窺われるが、その後の関心は、短歌のスタイルへ移った。一九二二年、周作人は『一握の砂』、『悲しき玩具』の中から十七首選んで訳した。ここで、当時訳出された啄木の短歌を一首選んで対訳で見てみよう。

何処やらむかすかに蟲のなくごとき	在什么地方轻轻的有虫鸣着似的
こころ細さを	百无聊赖的心情
今日もおぼゆる	今天又感到了。[8]

啄木の持った詩形と詩のリズムは、どれも前衛的、斬新なものだった。そして、生命と自然との交感が虫の鳴き声にひしひしと感じられる。当時、訳された啄木の青春の歌（三行詩）が多くの中国青年を興奮させ、中国の新詩運動にも新風を吹き込んだのである。[9] 一方、一茶の俳文に周作人の目を向けさせたのは、他ならぬその俳文の境地である。「一茶の詩」を見てみよう。

> 一茶の俳文は特別であり、彼の特殊な境遇で、風変わりな慈悲の性格を成したが、彼の詩は芭蕉の閑寂な禅味から脱皮して、殆ど松永貞徳の俳諧と洒落（言葉の遊び）の境地に達したのである。しかし、彼の根底には他人と違うところがある。彼の俳諧は人情的であり、彼の冷笑は人生の涙を含んでおり、強大さに対する彼の抵抗、弱小に対する彼の同情は、同一のところから出ている。一茶には芭蕉のような閑寂が見られず、また貞徳派の俳諧には一茶のような情熱を持っていない。日本の俳人世界に現れた空前絶後の一茶を、俳句界における彗星だと称する人もいたが、一茶は突然現れ、突然去って行く。この奇人の詩を訳すのは、当然難しくて不可能であるが、あえて失敗と困難を冒してまで、この詩人を紹介してみよう。原文は素晴しいが、何とかその醍醐味を訳せれば、私にとって最大の願望成就である。[10]

以上を見るに、周作人は、何の飾り気もなく、薄っすらと生の悲哀といった生活感を滲ませる一茶の俳文を絶賛し、特に人類を万物の霊長と看做さぬ一茶の思想に共感を覚えたようである。一茶のような俳文は、無論中国にもなく、短詩形の紹介を通して、周作人は日本独特の俳諧文学と出会ったのである。

一九二一年の初夏、病気療養中の周作人は、北京郊外の西山という休養地に滞在した。友人宛「山中書簡」の中で蝿について触れている。「山中の蝿は実に多く、確かに“意表をつく”ところがある。毎日、午後になると、窓の外は蝿の群れが五月蝿く飛び回っている。まるで蜂のようだ。網戸に冷たい布を掛けてしっかりと閉めても、出入りの時になお数匹の蝿が屋内に入ってくる。すると、屋内の隅々に蝿を捕る用紙を置いて、棕櫚の刷毛で蝿を追い回して叩くが、なかなか捕れない。イギリスの詩人ブレークには蝿の詩があるが、彼は蝿を無常の人生と譬えている。日本の小林一茶の俳句にも、「やれ打(うつ)な蝿が手をすり足をする」(文政四)とあるが、日頃私も愛読していて、実際はそんなに寛大にはなれないのである。(略)それでも私の心底にこんな矛盾を抱えている。一面において蝿は、小生と同じように生命をもって共に生きていると認めているが、他の一面においては、蝿の足に害毒の菌がいっぱい付着しているので、とくに頭上を飛んだ後、手で掻きたくなる。すると、この憎むべき蝿を殺したいのだ。この情と知の衝突は、どうしても調和できない。」[11]と書いてある。この文に蝿をめぐって述べているのは、一種の俳諧的な情趣ではないだろうか。思想的に掘り下げれば、周作人の人道主義思想も指摘できるが、周作人の探し求めるものが、正にそのような生活感の溢れる散文的境地であると思われる。

周作人には「蝿」と題する短い散文があるが、中でも少年時代に蝿と戯れていた子供は、大人になったら蝿を嫌うものとして見るようになる、と書いてある。そして蝿の伝説についてはこう記されている。「中国古代には蝿に対して何の反感も持っていなかったようである。(略)緑色の蝿は好色だが、その他の蝿はうるさいだけだという。古代に伝えられていた蝿は、たとえ善良なものでないにしても、とりわけ他の昆虫より悪いとは言えない。日本の俳文の中で

も蝿は朗詠の対象として登場し、やや穢れの色合を持っているが、賑やかで温かな境地を持つ。小林一茶は奇特な詩人で、彼はすべての生物を兄弟や友とするが、蝿も勿論その仲間である。」[12]と。一茶の俳文は、花鳥風月とは異なる世界を持っており、中には詩への想いや生活の雑感が溢れている。周作人は、その俳諧的情趣、及び自然と生命の交感を散文的境地に見出し、東洋的な趣味ではなく、生命力のある文学形式として俳文の芸術性を発見したのであろう。

周作人には俳諧文の源流に関する二つの文（「談俳文」と「再談俳文」）があるが、次はこの二つの文について見てみよう。

> 日本の俳文は特徴があり、それは文人ではなく、俳人、即ち俳諧詩人により具現化される。俳人は専ら俳諧の連歌や俳句を作るが、散文、つまり俳文も書く。（略）俳諧文学は歴史的変遷を経過したが、俳文の内容は様々である。閑寂や幽玄もあれば、洒落や飄逸味もある。そして、花鳥風月に情趣を求めるものもあれば、人生の滑稽味を滲ませるものもある。要約すれば、俳文の境地は三種類に分けられる。一、深遠な典雅の境地、二、俳諧的諷刺の境地、三、その中間に介在する俳諧的情趣である。ただし、表現形式はすべて簡潔を旨とし、余韻を尊び余分な表現を嫌う。文章は、殆ど同じ傾向を持つが、巧みな比喩や適切な典故の引用、そして洗練された筆致と含蓄の語句を使う。自由自在に風雅、卑俗の語句と漢文を駆使して混入した文章の中で調和の美を表現する。正に至難の業である。（略）
>
> 日本の散文系統は、古代に漢文と和文の両派があり、中古に入って和漢混合となり、それが今日の文言の基礎となっている。俳文は、更に雅俗の混合から新しい体裁が生まれ、新たな世界を表現できるようになった。近代になると、西洋文学の思想が輸入され、言文一致の運動で日本語の表現が大きく変わり、そしてモンテニューやラムの文章も多くの読者に影響を持つようになった。これらはすべて西洋流の散文ではないだろうか。現在、日本の随筆（中国では「小品文」と呼ぶ）の大半は俳文であり、高浜虚子が自分の文集を新俳文と自称する以外に、俳文を標榜する、或は軽蔑する

ものは特にいない。このことはもっともだと思うが、恐らく中国では永遠に理解を得られないだろう。[13]

「再び俳文について」の中で周作人は、『文心雕龍・諧隠第十五』の全文を引用してこう述べる。「劉君は中国では空前の批評家であり、条理を立てて俳諧文を整理したのは実に有り難いことである。しかし、彼は正統派であり、冒頭の章『原道』、『徴聖』を見ないにしても、一目瞭然である。正統派は経書を重んじて、俳諧は観るに足らざるものとしたのだ」、だが、「日本の俳文は全然違う。古い連歌から脱却した後、新しい俳諧の連歌が生まれ、更に韻文から散文に変わり、その中に新しい生命が流れているのだ。（略）中国には俳諧文があるにはあるが、系統が乱れている。しかもそれは俳諧文の流れから生まれてくるのではなく、傍流の一種である。私から見れば、公安派と竟陵派以降、混合した新しい文章が生まれたのだった。」[14]と。更に中国の俳諧文の有無について、「もし古から一篇ぐらいの良い文章があるかと聞かれたら、やはり一つも挙げられないのだ」と、厳しい目で見ている。

周知の如く、詩文を重んずる中国の文章歴史において韻文と韻文でないものに対しては全く別格の扱いだった。『文心雕龍・総術第四十四』にも「韻無き者は筆なり、韻有る者は文なり」と記載されており、また純粋な「詩」、「文」、「賦」の類が収録され、「筆」の類が完全に切り捨てられた『文選』により、それ以降、「文」に対する狭隘な観念が一般的に形成されたのだった。その後長い間、「文以載道」、つまり「文」に対して聖人の道が強調されたわけである。ところで、周作人に於いて日本の俳諧文と中国のそれとの違いだけを見出し、それを比較するのは彼の目的ではない。周作人の場合、俗文学から日本文学の発見は彼の目的であると思う。文化の象徴性から考えれば、俳諧詩人により生まれ変わった日本の俳諧文から現代随筆への変遷において中断されなかった俳諧文学の生命力が流れていて、これが日本文学の独創性ではないだろうか。そこに俳人の自由精神が存在したことも考えられる。その自由精神は、俳諧的情

趣と言ってもいいが、それだけでなく、俳諧文を支えている器としての散文的境地を指すものと思われる。周作人が探し求めようとしたものが、そのような散文的境地であった。そうだとすれば、その散文的境地は、ある意味では周作人の注目を払った明末の公安派や竟陵派[15]に一脈通ずるものがある。このように見てくると、周作人により日本の俳文に見出されたのは、即ち中国の文章歴史に於いて軽視された俳諧的情趣であり、そして彼が公安派や竟陵派の切り拓いた文章世界に目を向けたのは、中国文学に埋もれていた弾力性のある文化的価値を見出そうとしたものと考えられよう。

Ⅳ　Essay・随筆・小品文

周作人は口語自由詩の実践などを通じて、「美文」、つまり小品文をも提唱した。新文学運動の主唱者の一人、胡適は、「五十年来の中国文学」の中でこう述べている。「白話文の散文は確かに進歩した。長篇の論説文も目に見える形で発展したが、これについて改めて論じる必要はない。ここ数年来、注目すべき散文方面の発展は、周作人らの提唱した小品文に見られる。この種の小品文は、平易な談話のなかに深みがあり、一見拙いように見えるが、実は滑稽味がある。小品文の成功により、『白話文では美文が作れない』という妄言を打破できるのである」[16]、と。小品文の確立は、一九二四年十一月に同人誌『語絲』（週刊）の創刊で決定的だった。主な執筆者は、周作人や魯迅、林語堂などを含めた錚々たる十六人である。雑誌の最大特色は、「忌憚のないことを書く」（魯迅「私と『語絲』の付き合い」）ことだった。もうひとつ、同人の芸術的な創作意識は強かった。「語絲文体」と呼ばれるほど彼らの文章は実に個性的だった。この雑誌において、周作人は小品文の散文境地を、魯迅は「雑文」のジャンルを切り拓いたのである。ところで、『語絲』の創刊で周作人にもうひとつの転機が訪れた。下記の文を見てみよう。

一人の人間は、人生のある時期において理想派になろうとする場合、芸術と人生に何らかの理想や主義を求めるものであろう。私は以前にユート

ピアに夢を抱き、「新しき村」の理想に憧れ、文学上においても自分の主張を唱えていた。今でも日本の「新しき村」の友人を尊敬しているが、そのような生活は趣味として自己満足のほかに、社会に対してどれだけ効力があるかを疑問に思う。人道主義文学の提唱も同様で、自分の趣味を満足させる点においては十分に意を尽くせるし、またこのような芸術と生活を営むには充分であろう。私は以前愛した芸術と生活のあり方が今も好きで変わっていない。ただ私の人生目的は少し変化が起きて、以前には隠見する主義を求めようとしたが、今は芸術と生活そのものを愛するようになった。[17]

この文に示されたのは、何も文学の転向ではなく、文学の自律性を目指す散文的境地だと思われる。換言すれば、観念的な世界から生活の世界へ、生活の中で芸術を発見するのが周作人のスタイルだった。生活は芸術の対象、或いは創造的行為となった場合、生活と芸術が融けこみ、きっと芸術性を生み出す源になるに違いない。なぜなら、芸術家にとって生活と芸術とは創造性の空間だからである。一茶の俳文にはそのような芸術性の世界が現れている。従って、周作人に於ける生活と芸術の発見は、突如現れたのではなく、新詩運動に於いて日本の短詩形などに関する一連の翻訳や紹介により、改めて文学形式というものに対する認識が深まったことに関っている。次の文に注目したい。

俳諧や俳文といった名称は語弊があるかも知れないが、ある特質を持った狭義の文章だと誤解される可能性がある。実際は必ずしもそうでもない。日本の松尾芭蕉、横井也有には些かそのような傾向が見られるが、フランスのモンテニュー、イギリスのラムとハント、ハズリット等の文章は、私から見れば同種類に入ると思う。古今東西とは関係なく、その特色は一つ、自分の書きたいことを書く。政治や宗教のために書くのではない。趣旨が同じならば、すべて同種類に入るわけだが、名称の問題はない。フランスやイギリスではEssay、日本では随筆、中国では小品文と呼ぶ。[18]

この文から周作人の思想上の成熟度が窺われるだろう。西洋の“Essay”、日本の随筆、中国の小品文は、それぞれ自身の文化を継承し、しかも近代的知性に富んだ散文世界である。ここに、戸川秋骨について考えてみる。ラムなどの随筆に絶大な影響を受け、日本の随筆に異彩を放った知性と自由精神の持ち主である戸川秋骨に対して周作人は、格別の目で尊敬している。先行研究では周作人と日本文学との関係について、谷崎潤一郎や永井荷風などの作家に着目して論じるものが多いが、戸川秋骨に対しては殆ど関心を払っていないようである。しかし、中国現代散文に与えた日本文学の影響を考える上で、漱石や荷風に続き、戸川秋骨の存在は見逃してはならないと思う。戸川秋骨に関する文章は、周作人の文集に「『凡人崇拝』」以外に思い出を語る数篇しかない。紙面の関係で全訳はできないが、「『凡人崇拝』」は要約すれば以下のとおりである。

《日本の現代散文家の中で、小生の敬服する人が何人かいるが、戸川秋骨はその一人である。私が最初に読んだ随筆の中で最も好きな一冊は、大正十五（1924）年刊行の『凡人崇拝』であり、当時、私はもう一冊買って友人に与えた。秋骨の文章特色は、ユーモラスと諷刺にあり、そのユーモラスは多くは文化批評に現れ、一般の文人論客より更に公正で辛辣である。彼は自由主義者であるが故に真の道徳家であり、その文章は彼の言うとおり、多くの道徳家に嫌われ、聖人君子も読むと眉を顰めるのである。この点で言えば、他の随筆家にはあまり見られないことで、そこが小生の最も敬服するところなのである。独断、横暴、および追随は、どれも彼の嫌うことであり、また彼の攻撃する目標となる。諷刺は短命である。何故なら目標が倒れた場合、その力も減少するからだ。だが、ユーモラスは長生きするものであり、死ぬことはないが、ファシズム勢力のもとでは死を装うことができるのである。秋骨の文章には、非常時に直面した犯人にも見られない一種の微笑みが独自に存在する。一部は勿論のこと、英文学のユーモラスに由来するものだが、一部は日本文学の俳諧に似通っている。彼が

俳句を作るとか聞いたことがないが、彼は「能楽」にも精通し、自ずと不思議な雰囲気を持っている。西洋風の論文にまるごと影響を受けた人とは異なる。》[19]

この文の中で、何よりも戸川秋骨の思想、及びその人物像を数語で捉えた周作人の目は鋭い。文章は一気呵成の気配がする。日本の現代随筆に異彩を放った戸川秋骨、そして中国の現代散文に小品文を切り拓いた周作人、慧眼を持つこの二人は、それぞれ自国の文化を継承した稀有の文人であり、しかも近代的知性を具有する自由主義者であった。この二人の散文について数語で断ずるのは唾棄すべく、改めて別稿で論じるつもりである。

V　結びに代えて

明治以降、日本と中国に於ける文化上の関係は逆転した。それ以後、中国近代史に於いて日本に学ぶ経験は二度あった。＜第一段階＞十九世紀末から二十世紀初頭、＜第二段階＞二十世紀七十年代後半以降の出来事である。第一段階では、日本を文明の窓口として、政治、教育などの諸制度の模倣、並びに翻訳を通じて、近代文明を摂取したわけである。上述の如く周作人は、第一段階の変革期に於いて文芸批評、翻訳、創作面での様々な実践を通じて、新文学の発展、及び日本文学の発見に一種の道標と叡智を示してくれた。近代中国にとって明治維新の与えた世界史的な意義は深遠で、両国間に不幸な戦争があったにも拘らず、その影響力は第二段階まで持ち続けていたのである。「文化は、その民族による最大努力の結晶であり、大抵は一時的で永遠ではなく、少数であり、全体ではない。従って、高明なる文化は、必ずしも現実の粗悪さとは一致しないものである。」(「日本文化の本を談ず」1936.7.5)、今後、厖大な周作人の文集から刮目する言葉を探し出して、混沌たる時代の中でこれらの言葉が持つ意味を吟味していきたい。

＊この研究は、発表者の「中国現代散文に与えた日本文学の影響」という構想の一部であり、未熟な部分が多く、ご批判を賜れば幸いです。ご清聴ありがとうございました。

［注］

①周作人「人の文学」、『新青年』５巻６号、一九一八年十二月

②周作人「新文学の要求　一九二〇年一月六日北京少年学会における講演」、『晨報』、一九二〇年一月

③周作人「文学上のロシアと中国　一九二〇年十一月、北京師範学校、協和医学校において」、『新青年』８巻５号、一九二一年一月

④周作人「日本近三十年来小説之発達」、『北京大学日刊』141－152号、一九一八年五月

⑤周作人「『現代日本小説集』序文」（1922.5.20）、『現代日本小説集』所収、中国対外翻訳出版、2005年

⑥フレデリック・ジェイムソン「グローバルな資本主義時代における第三世界の文学」参照、詹明信『晩期資本主義的文化逻辑』p.516、三聯書店、一九九七年

⑦拙稿「遊歩者としての経験　弁髪・にせ毛唐・見世物」（『国文学言語と文芸』121号、言語と文芸の会編、おうふう、平成16年10月）に於いて『クレイグ先生』と『藤野先生』に言及している。

⑧周作人訳『如夢記　石川啄木詩歌集』、中国対外翻訳出版、二〇〇五年

⑨拙稿「啄木と周作人」（『國文学』解釈と教材の研究、第49巻13号、平成16年12月号、学燈社）を参照。

⑩周作人「一茶の詩」、『小説月報』12巻11号、一九二一年十一月

⑪周作人「山中書簡」、『晨報副刊』、一九二一年六－九月

⑫周作人「蝿」、『晨報副刊』、一九二四年七月

⑬周作人「談俳文」（1937.4.18）、『文学雑誌』１巻２期、一九三七年七月

⑭周作人「再談俳文」（1937.5.14）、『周作人自編文集・薬味集』所収、河北教育出版社、二〇〇二年

⑮周作人の『中国新文学の源流』の中に、「中国新文学の源流は明代にあり、その原因は清代にある。」との有名なセリフが残っている。明末の公安派、竟陵派はその源流に当たる。両派とも古文辞派の詩風＝復古調に反対し、性霊説＝精神的境地を重んずる点では一致する。明末には山人文学が盛んで、中国文学批評史において竟陵派により初めて詩に関する“活き物”説が唱えられる。『詩帰』はその代表作。「趣は境地より生まれ、情は日に移り変る」の如く、閑寂に禅機を求めて楽しむ。古代に散逸した詩を集め、古詩に「真（まこと）」の精神を求める。詩の鑑賞に関しては、「山はその高さにあらず、深さにあり、川はその長さにあらず、曲りにある」との名言がある。「小品文」の由来は、『閑情小品』などに見られるように明末の文人集に求められる。文章は経国の大業であると看做された中国の文章歴史において、自由自在の性霊説を唱える公安派や竟陵派は、明らかに伝統に背いた異端者である。なお、「公安」と「竟陵」の名は、それぞれ地名に由来する。

⑯胡適「五十年来中国之文学」、『申報五十周年記念特集』初出、一九二二年、『胡適周作人論中国近世文学』所収、海南出版社、一九九四年

⑰周作人「『芸術と生活・自序』」（1926.8）、『周作人自編文集・芸術と生活』所収、河北教育出版社、

二〇〇二年
⑱周作人「再談俳文」、同上
⑲周作人「『凡人崇拝』」、『青年界』11巻4期、一九三七年四月

参考文献

『文学＝イメージの変容』、フレデリック・ジェイムソン著、後藤昭次訳、世織書房、二〇〇〇年
李鴎梵『中国現代文学与現代性十講』、複旦大学出版社、二〇〇二年
王済民『晩清民初的科学思潮和文学的科学批評』、中国社会科学出版社、二〇〇四年
『現代学術史上的俗文学』陳平原主編、湖北教育出版社、二〇〇四年
邬国平『竟陵派与明代文学批評』、上海古籍出版社、二〇〇四年
王光明『現代漢詩的百年演変』、河北人民出版社、二〇〇三年
郭預衡『中国散文史』上・中・下、上海古籍出版社、二〇〇〇年
徐舒虹『五四時期周作人的文学理論』、学林出版社、一九九九年
『戸川秋骨　人物肖像集』坪内祐三編、みすず書房、二〇〇四年
戸川秋骨『凡人崇拝』、アルス、大正十五年
戸川秋骨『食後の散歩』、第一書房、昭和十六年
周作人『知堂書話』上・下、鐘叔河編、中国人民大学出版社、二〇〇四年

＊討議要旨

山崎佳代子氏は、①短詩形の小詩実験が行われ、啄木の和歌と一茶の俳文が訳されるが、周作人が持っていた日本のアヴァンギャルド運動に対する考え方がどのようなものであったか、②ヨーロッパのアヴァンギャルドでは、日本・中国の古典詩の受容が広範にわたって行われるが、周作人が啄木や一茶など日本の定型詩を選んで口語自由詩を選ばなかった理由、について尋ね、発表者は、①20世紀初頭の文壇も形成されていない錯綜した状況の中国では、思想的な問題の方が注目されていたようだ。②周作人の文芸活動を支える思想的根幹は、純文学ではなく俗文学であり、中国の伝統的な「詩文」という文学的観念を用いない。一茶や啄木への注目もその流れの中に位置づけられる、と答えた。

坪井秀人氏は、同時代のヨーロッパでの日本詩の受容がジャポニスムの枠の中であったのが、彼の受容はヨーロッパとは違うという印象を持ったとの感想を述べた。